

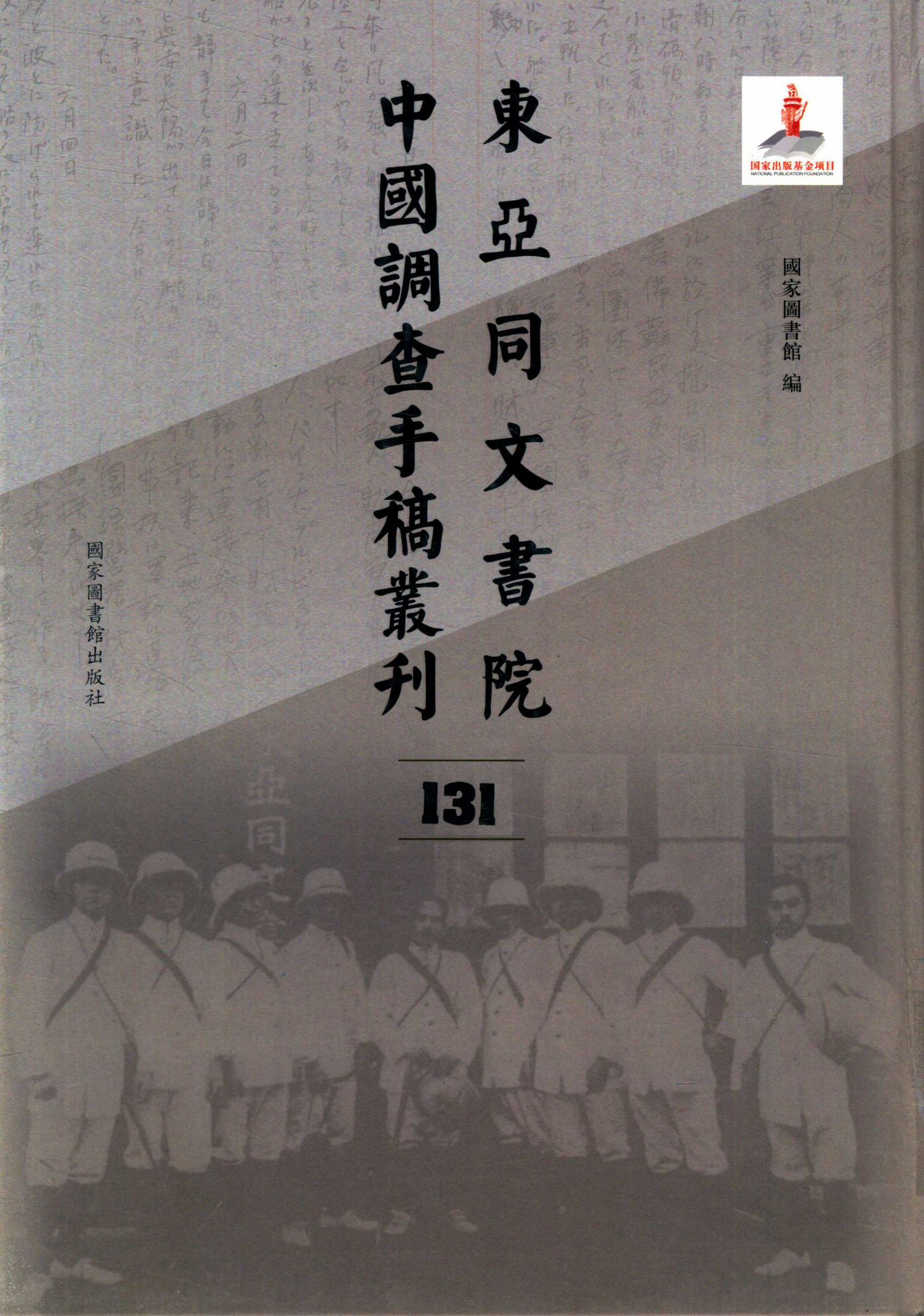


國家圖書館編

# 東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

131

國家圖書館出版社





國家出版基金項目  
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館  
編

東亞同文書院  
中國調查手稿叢刊

**131**

國家圖書館出版社

# 第一三一冊目錄

昭和五年（一九三〇）調查報告（第二十七期生）

山西產天然木炭

山西產天然木炭

粵漢鐵路沿線經濟調查班貿易調查

粵漢鐵路沿線經濟調查班貿易調查

武漢ニ於ケル英人企業大勢ニツイテ

武漢英資企業の趨勢

北支諸港に於ける倉庫業

華北各港口的倉儲業

山下

第四十一卷

..... 一

山中秀宣

第四十二卷

..... 四三

柿田琢磨

第四十三卷

..... 一七五

貴堂貞三

第四十四卷

..... 一二三三

北支各港ニ於ケル仲仕苦力調査  
對華北各港口搬運苦力の調査

牛島俊作  
第四十五卷……………三五九

青島港貿易概況  
青島港貿易概況

天野治邦  
第四十六卷……………五〇一

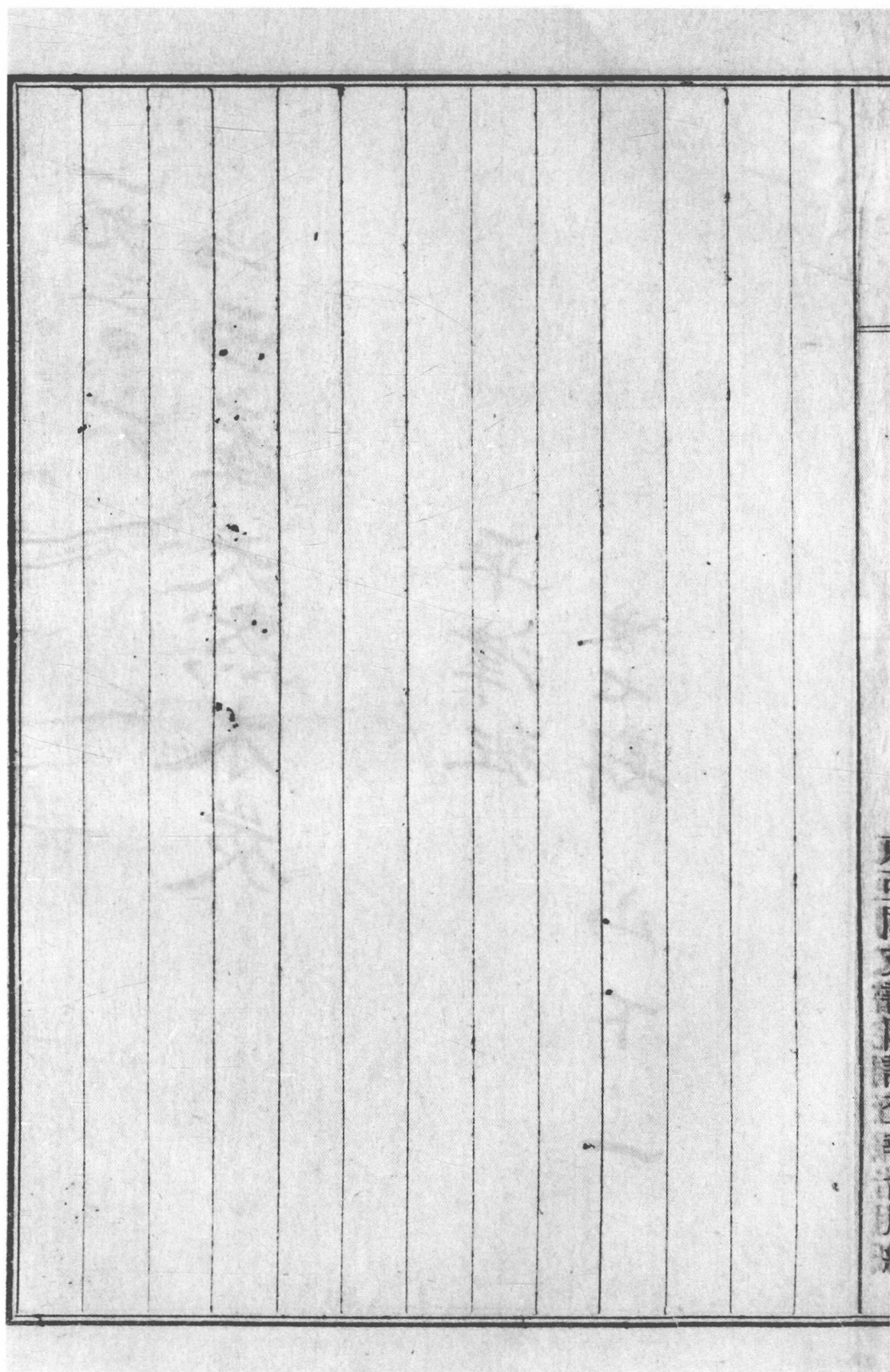
一九三〇、六

山西產天然木炭

平津班

廿七期

山下



燬山見本

A. 種

B. "

C. "

別包提出

此の調査に當つては

「天然木炭の、我々家庭燃料界に及ぼす  
影響」と、其の産出する場所（太田外在雄）  
に對する所々あり



山西省產天然木炭目次

第一章 天然木炭とは何か

第二章 產地々域

第三章 産地、地勢及地質

第四章 炭質

第五章 産地氣候

第六章 交通

第七章 稼行趣狀況

第八章 天然木炭の生産量

煨炭組成及



第四十一卷 山西産天然木炭

大同府  
書院  
圖

第一章 天然木炭とは何か

ふ天然木炭とは、支那山西省大同府歙リ、  
辺境にかけて産出する煨炭を総してい  
ふ煨炭は一種特別の石炭で、本邦に紹介せ  
られより日尚浅く、未だ専門的研究の發  
表せられなかりがな。従て今後の研究に後  
つ所が甚大である。

本炭は後に示すが如く、普通石炭が家庭用  
燃料として大欠点とする、硫黄の含有  
料極めて少く、（殆んど木炭に等し）着火温度  
も亦極めて低いから直ちに火鉢に使用し燃  
焼する事が出来る。其灰も白く、烟も亦等しい。  
唯欠点とする所は、多少の揮発分を含む爲、

炭火の際いくらかり臭気を発する事である。  
而し慣るれば假令密閉した室内の暖房に使用  
しても少しも其刺戟を感じなくなり、且普通  
木炭よりは遙に火持が長く(熱量約二倍)  
木炭に往々見る様な放置しておくが爲に立  
消する様な事がない。価格の上からいっても  
殆んど木炭の半額である、其上供給は年々  
増え、たとつても過言ではない。

2  
近來家庭燃料の大宗たる木炭の供給が  
漸く不足を告げ、価格の年と共に騰貴する  
に伴ひ、之が代用品として各種燃料の研究  
が著しく発達しつつあるが、木炭代用固形  
燃料としては、

1. 価格が低廉と供給の豊富なる事、

2. 火鋒、炬燵に容易に使用し得る事、

3. 着火容易にして、一旦着火せる時は燃焼しき  
る逆形をくずさず、又水消し、~~氷~~ 壺消を  
なし得る事、

4. 全然無煙なる事、

5. 自由に過なり加減を為しうる事、

茅の諸炭が必要であるが、之茅の炭に於て  
は現在の木炭代用品多る ストン炭、ユーライ炭  
リグノ炭、練山炭等は、とうてい 煨炭の比ではない  
煨炭の出現は実に我々燃料問題解決の  
一大福音である。

第二章 産域

所謂山西大炭田の二に当り、山西省大同縣の西方より豊南にかくる、長方形の大なる地域内にして、最大延長百十料、最短延長十七料と称せらる。西南朔平に起り、乱道溝、吳家窑、口泉鎮、より豊鎮、大海の南方を過ぎ、屯雲縣、牛坪堡を以て包圍する。現在最も多く産出する地域は、口泉鎮を中心とする地方である。

別項地圖參照

カ三 産地の地勢及地質

口泉は海拔三千七百呎あり。一体に丘陵地帯である。

地質は侏羅紀、二疊紀、上部炭紀、奥、武利亜紀、オルトワイシヤ紀に屬し、最低部には太古代に屬する表木山島の片麻石を見る。

今山灰層は砂岩及頁岩であつて、地質構成上より之を、上部含炭層、及下部山灰層の二部に分け得る。其各部に於ける山灰層は次の如くである。

上部含炭層は侏羅紀であつて、

別圖の如く四層有り。

下部<sup>含</sup>山灰層は石炭紀であつて別圖

の如く三層有り、

而して上部<sup>含</sup>山灰層は下部<sup>含</sup>炭層の一

部を覆ふものであつて、区域は余り大では

ない。が然し、現在煨炭を産出するのは

主として此上部<sup>含</sup>山灰層の内のみ

層<sup>の</sup>上<sup>の</sup>皮となるものであるが

ら、此山灰層の地層と、煨炭の組成とは、

甚は多量密接なる関係があるものである。

尚煨炭の組成に關しては別に記述する

であらう。

此の上下兩層（含山灰層）の整合的關係

7

二付ては、專文學者の悦に依れば、此兩者  
 は、或期方には共に水中にて生成せるもの  
 であつて、下部含炭層が沈没せる後、  
 上部含炭層が沈没するに、何等の  
 地<sup>地</sup>續的变化が有つたかどうなる。又一時に  
 陸地を構成したかでも無い、從て地層の  
 厚さ、其他の變化<sup>は</sup>至つて少く、断層の如き  
 も、後時代に生じたる小断層の外には、  
 大なる力が無いから、二疊紀、三疊紀  
 侏羅紀は、地質は時代の異なるに不  
 拘、整合的である。上下含炭層<sup>炭</sup>は、  
 二對する垂直距離は、約五百メー  
 ートル、乃至六百メーートルであつて、  
 各炭層によ